

真が1990年に発行された福島県植物誌に載せられている。アンドンマユミが健在であることが明らかになったが、花の実物を見ないかぎり、上記の異なる見解に結論をだすことは難しい。Flora of Japanでアンドンマユミを記載する必要から、福島県の数人の方に花の標本を見たいことを依頼したところ、福島市の折笠常弘氏が、桧枝岐村の元村長の星 廣一氏が栽培していることを知り、桧枝岐村にでかけて写真 (Fig. 1) と花の標本を届けて下さった。これでアンドンマユミの性格を明らかにすることができた。1980年頃に発見されたものは桧枝岐の幾軒かの家に植えられたと言われるが殆どが枯れ、星氏宅のみに1株が鉢植えで残っていたと思われる。

イトマユミに比べるとアンドンマユミは葉が大きく、長さ5-12cm、幅2-4.5cmあり、花序には1個または3個の花が着くが、3個の場合、小花柄が長く、花期に両側の2個では長さ約10mm、中央の1個では長さ4-6mm、花はやや大きくて径5-6mmである。イトマユミは、葉は長さ3-8cm、幅1.5-3cm、両側の2個の小花柄は花期に長さ3-5mm、中央の1個は長さ1-2mm、花は径約3mmである。アンドンマユミの計測した個体数は少ないけれど、イトマユミとの間には明らかな差異がある。特に花序につく3個の花のうち、中央の花は両側のものから少し短く細長い小花柄をもつ。中央の花は発育の悪いものがしばしば見られるがそれでも細い小花柄をもつ。イトマ

ユミと明らかに異なる。両者は別種として区別すべきものと思う。上記の特徴からすると、アンドンマユミは会津に限定され、大陸のものはすべてイトマユミである。

アンドンマユミについて折笠常弘氏には文献、写真、花の標本など大変御世話になり、また新潟の伊藤 至氏にも文献で御世話になったことを厚く御礼申し上げます。今回の調査で頑なに協力を拒否した複数の人に出あったのには驚いた。植物を保護するために自生地を秘密にしておきたい為のようである。しかしそうした消極的な措置でこの植物が保護される保証はない。自然災害や、林道、ダムを作るなどの人為破壊を受けないとも限らないし、現在の状態では自然消滅も考えられる。マユミ属のものは挿し木で活着しやすいから、アンドンマユミもそれで増やせると思う。挿し木で増やすか種子でも蒔いて増殖を図る必要がある。特に地元の植物研究者にぜひそうした努力をお願いしたい。

A. Leaves 5-12cm long, 2-4.5cm wide; flowers 5-6mm in diam.; pedicels of 2 lateral flowers ca. 10mm long, pedicel of central one 4-6mm long ..... *E. oligospermus*

A. Leaves 3-8cm long, 1.5-3cm wide; flowers ca. 3mm in diam.; pedicels of 2 lateral flowers 3-5mm long, pedicel of central one 1-2mm long ..... *E. pauciflorus*

(東京大学理学部附属植物園)

## 帰化植物ノート(6) (浅井康宏)

Yasuhiro ASAI: Miscellaneous Notes on the Naturalized Flora of Japan (6)

### 13) ケショカツサイ (ケオオアラセイトウ) (新称)

周知のようにショカツサイは中国の原産で、古く江戸時代から我が国でも栽培されてきたが、広く逸出帰化状態になったのは第二次世界大戦後のことである。本種 *Orychophragmus violaceus* O. E. Schulz var. *violaceus* は全草が平滑で果実も無毛であるが、最近、果実に顕著な白軟毛を密生するものが、栃木県下で田代俊夫氏により採集

(1994.5.15) された。これは var. *lasiocarpus* Migo (J. Shanghai Sci. Inst. Sect. 3, 4: 149, 1939), すなわち「毛果諸葛菜」にあたる。なお同氏が、この存在に気付かれたのは一昨年の由。現在、宇都宮市近郊の塩谷町の路傍などに、通常の無毛のものに混ざって群生し、この有毛品は着実に殖え、分布範囲も広がっているとのことである。

従来、我が国でも知られているヨーロッパ原産で果実が有毛なケカキネガラシ *Sisymbrium*

*officinale* (L.) Scopoli var. *officinale* に対する無毛のケナシカキネガラシ (ハマカキネガラシ) var. *leiocarpum* DC. のそれに似ているが、この場合は母種との関係が逆になっている。これをケショカツサイ (ケオオアラセイトウ) と呼んでおくが、恐らく母種に混じて各地に存在するものと思われる。

#### 14) オオヒナツメクサ (新称)

ヨーロッパ原産のヒナツメクサ *Trifolium resupinatum* L. (Sp. Pl. : 771, 1753) は、第二次大戦後に神奈川県藤沢市内に帰化したものを筆者が見出し (1952. 6. 13), これを久内清孝先生が同定されたものである。そして本属のものとしては可憐な花姿にもとずき、筆者が上記の和名を与えた経緯をもつ。

その後、本種は各地で散発的に見つかっているものの、未だ仮生帰化の域を脱していないようである。ところで近年、この仲間の標本が可成り各地から筆者のもとに寄せられているが、北九州市の時田房恵氏から送付されたもの (同市の小倉南区葛原の土手で、1994. 5. 12に大村和恵氏採集) は、全草が無毛、平滑で、花がないとタチオランダゲンゲの生育の良いものを想わせる。しかし詳細に検討してみると、ヒナツメクサの範疇に入るものの、これよりも全体が大振りで、しかも茎は中空で太く、80cm 以上 (母種では60cm 以下) にもなる。また小葉も長さ3cm (母種では1.5cm 許) と著しく大きい。花は淡桃紫色で強い芳香を有し、花序は径1.5cm (母種では1cm) ほどで、果期には2cm 以上にもなる。

周知のように植物体の大きさなどは生育地の環境により、かなりの影響を蒙るものであるが、本種の果期の肥大した袋状の萼にみられる、蝸牛の角を思わせる湾曲した2本の裂片が良い特徴である。これを筆者は *T. resupinatum* L. var. *majus* Boiss., 1872) (*T. suaveolens* Willd., 1816; *T. resupinatum* L. var. *suaveolens* (Willd.) Dinsm., 1932) と同定し、オオヒナツメクサと呼ぶことにしたい。これはヒナツメクサの牧草用の栽培変種と考えられているもので、ちょうどオオシロツメクサ (本誌 63 : 197, 1988) の場合と同様である。しかし原産地でも、これを上記の学名のよう

に変種とするか、あるいは種のランクで扱うかについては、今後の検討が必要とされている。

ちなみに、この変種のタイプ標本の産地はイランであるが、現在、地中海沿岸諸国を中心に帰化している。なお反対に母種よりも草丈が低く密生し、葉も小型で、花序が径1cm 以下と極端に小さく、やや乾燥地を好むものに、コバナヒナツメクサ var. *microcephalum* Zohary (1970) がある。イスラエルのもをタイプとして記載され、現在、フランスやギリシャ、トルコなどといった地中海沿岸地域を中心に生育している。これに当たるものも、既に我が国に入っている可能性がある。同学諸氏の注意を望みたい。

今回のものの侵入経路としては、時田氏も筆者宛の私信の中で触れておられるように、近年、有力な帰化植物の侵入源の一つとされている道路改修工事 (砂防) などに繁用されている緑化用の「吹き付け種子」に随伴するものと考えられる。なお同氏によれば、同様のものが別の場所からも見つかっている由であり、恐らく各地に点在生育しているものと思われる。

なお、この他に近年、本属の外来品が幾つか見つかっている。

地中海沿岸地域原産の *T. tomentosum* L. (1753) はヒナツメクサに近縁で、香川県坂出市で三谷進氏が採集されたもの。基部から多くの枝を伸ばし、15~20cm 許になる一年草。果実に綿毛を密生し、花後に肥大した1cm 許の花序は、ちょうど膨らんだ風船を思わせることから、これをフウセンツメクサと呼んでおく。

またヤマブキツメクサ *T. fucatum* Lindley (1836) (*T. flavulum* Greene, 1892) は、アメリカ合衆国の西海岸 (カリフォルニア~オレゴン州) 原産の大形無毛の一年草。茎は中空で、小葉は2.0~2.5cm 許、目立った淡黄色の大きな花序をつけることに因み、上掲の和名を与えた。萼は長さ5mm、花冠は1.5~2.0cm。愛媛県下のイチゴ畑に生えたのを、蘇我部友和氏が採集されたもの。長年にわたり同県のプロラ調査に携わっておられる今治明德短期大学の山本四郎教授を通じて、検討する機会を得た。恐らく同地へ輸入された園芸植物に随伴して侵入したのもであろう。いずれも

現在のところ、一時的な仮生帰化の一員に属するものと考えられる。

終わりに興味ある資料を提供され、検討の機会を与えられた田代俊夫、時田房恵、三谷 進、蘇我部友和の各氏を始めとする関係者各位に敬意を表す。

In the present paper, the author reports some alien plants recently naturalized to Japan.

1) *Orychophragmus violaceus* O. E. Schulz var. *lasiocarpus* Migo of Chinese origin was discovered in sunny waste sites of Shioya-cho, Tochigi Pref.,

central Honshu on May 15, 1994.

2) An European Trefoil, *Trifolium resupinatum* L. var. *majus* Boiss. was found in sunny grass fields of Kita-Kyushu, Fukuoka Pref., northern Kyushu on May 12, 1994.

3) *Trifolium fucatum* Lindl. with large yellow flowers, a native of western N. America and *T. tomentosum* L. of Mediterranean countries, were also found in Shikoku as casual aliens.

(本誌 55 (5) : 157-160 (1980) から続く)  
(東京歯科大学)

### ホソバノキミズ琉球に分布 (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: *Elatostema lineolatum* Wight var. *majus* Wedd. is Found in the Ryukyus

小泉源一氏は、1928年に奄美大島からオオキミズ *Elatostema tumidulum* Koidz. という新種を発表している。ところがその後この植物が採集されないこともあって、完全に忘れられて、現在までこれに関係する報告は見当たらない。新種とされたのは田代善太郎氏が1924年3月に奄美大島で採集した標本に基づく。正基準標本は京大に、副基準標本は東大にある。しかしこれが唯一の採集ではなく、生熊与一郎氏が1910年9月3日に奄美大島の湯湾岳で採集した標本が京大にある。この標本は新種発表の際には引用されていないが、小泉氏が *E. tumidulum* Koidz. と標本上に記している。したがって現在はどうなっているか解らないが、この種類が奄美大島にあったことは確かである。しかしこれは新種ではなく、台湾、中国中部・南部、インドシナ、ビルマ、ブータンに広く分布する *E. lineolatum* Wight var. *majus* Wedd. と同じものと思う。

奄美大島のものと同じものが沖縄本島にも見られる。1887年3月に田代安定氏が今帰仁間切、ラッパ山で採集した標本が2枚東大にある。筆跡からすると伊藤篤太郎氏ではないかと思うが、*E. lineolatum* Wight var. *major* Thw. と記して、正しく同定されている。しかし伊藤・松村氏の論文 *Tentamen Florae Lutchuensis* は、1899年に離弁類の一部が発表されただけで、後が続かなかつたので、イラクサ科は発表されないでしまった。松村

任三氏の日本植物名鑑 (1912) にはこの学名の植物が収録されているが、分布は台湾だけしか記されていない。琉球の標本も見ているはずなのに引用していない。琉球植物の論文の発表が途中で途切れたのと同様なのであろう。採集されてから100年以上経つのに、その後採集された話を聞かないので、琉球の植物目録にも載らないでいるが、奄美大島同様かつては沖縄にも存在していたし、捜せば見つかるかもしれない。琉球の目録に入れておくべきものである。図は中国植物図鑑 1 : t. 1030 (1972) や *Flora of Taiwan* 2 : t. 258, (1976) に載せられている。

*Elatostema lineolatum* Wight var. *majus* Wedd., *Monogr. Urtic.*: 312 (1856); in DC., *Prodr.* 16 (1) : 182 (1869), ut  $\beta$ .

*Elatostema lineolatum* Wight var. *major* Thw., *Enum. Pl. Zeyl.*: 260 (1864).

*Elatostema tumidulum* Koidz., *Pl. Nov. Amami-ohshima* : 11 (1928); in *Act. Phytotax. Geobot.* 1 : 170 (1932), syn. nov.

Hab. Ryukyu. Isl. Okinawa, Nakizin - magiri, Rappayama (Mar. 1887, Y. Tashiro, TI). Isl. Amami-ohshima, Yuwandake (Y. Ikuma, Sept. 3, 1910, KYO; Z. Tashiro, Mar. 1924, Type of *E. tumidulum*, KYO, TI). (東京大学理学部附属植物園)